復興を持続可能な街につなげるには

グローカルインタビュー

岩手県釜石市長

野田 武則氏

のだ・たけのり　1953年岩手県釜石市生まれ。専修大学法学部卒業後、家業の農林業に従事。88年、野田学園甲東幼稚園園長。2003年岩手県議。07年11月、市長就任。合気道・居合道とも2段だが「今はやる機会がない」。趣味の釣りも「市長になってから一度も行ってない」。唯一、心が休まるのが愛犬（ゴールデンレトリバー）との散歩。毎晩8時や9時、時には深夜0時ごろ、何も考えずひたすら犬と歩く。座右の銘は「常に誠実であれ」。

ラグビーW杯誘致し世界に感謝
大型店核に港と一体のにぎわい

近代製鉄業の発祥地である岩手県釜石市は戦後、新日本製鉄（現・新日鉄住金）釜石製鉄所を抱える東北最大の企業城下町として栄えてきた。しかし1989年に高炉の火が消え、衰退が加速する。そこに東日本大震災。1000人を超す死者・行方不明者を出した惨事から間もなく4年。三陸縦断道路や公営災害住宅の建設など本格復興に向けた動きが加速しているが、ピーク時の約4割になった人口は今も減り続けている。持続可能なまちづくりをどう進めるのか。野田武則市長に聞いた。

Q 2011年3月11日の東日本大震災から間もなく4年。大規模な復興工事が進んでいるが、人口減も止まらない。真新しい街が再生しても人影が見えない……。そんな懸念をどう払拭する。

A まず大事なのは被災した方々の住まいと暮らしの再建だ。そして未来に向けた地域活力の向上を進める。昨年は市中心部にイオンが開店し、これを核としてにぎわい再生の第一歩を踏み出した。

釜石市では約4000の被災世帯のうち約1300世帯が復興公営住宅を、約1700世帯が自力再建を望んでいる。残る世帯は復興に合わせて考える方々だ。そこで43カ所に1342戸の公営住宅を建て、21カ所に約1700戸分の宅地造成を行う。順次着工し、公営住宅は3割が完成、入居も始まった。今後も計画通り進め2015年度中に計7割、16年度中に全て完成させる。

暮らしの再建は「三陸の大地に光輝き希望と笑顔があふれるまち釜石」を目指し、①スマートコミュニティー②産業福祉都市③フィールドミュージアム――の3本柱で進めていく。

スマートコミュニティーは、震災を教訓として非常時にも電源を確保できる街づくりを進める。

禁複製・無断転載

イオン釜石の開店を太鼓で祝う地元青年団

世界遺産登録を目指す橋野高炉跡

復興住宅や新設する学校に太陽光発電システムを設置する。国内最大級の風力発電を建設する計画もある。波力発電の可能性を探る新しい研究も始まることになり、再生可能エネルギーの技術開発拠点としての芽も出てきた。産業福祉都市に向けて包括ケア推進本部を立ち上げた。市内のどこに住んでいても安心して暮らせる街にする。

フィールドミュージアムとは「釜石全体が１つの博物館」ということだ。世界遺産登録を目指す橋野高炉跡は近代製鉄発祥の地として知られる。釜石港を描いた海図は日本人が描いた海図の第１号。鉄道も、新橋―横浜、大阪―神戸に続き３番目に開通したのが釜石の鉄道だった。1896（明治29）年と1933（昭和８）年の三陸大津波を経験し、戦時中には２度の艦砲射撃も受けた。ラグビー日本一の歴史もある。

にぎわいの拠点にはかつての中心街、東部地区を選んだ。港との一体感がある「釜石らしい」地区だからだ。以前ここには世界的にも珍しい橋上市場があり、歩いて楽しめる地区だった。そこに①イオンを中心としたにぎわい拠点②市役所や津波記念館などの学びの場③魚市場を中心とした交流拠点――をつくる。

イオンは釜石にとって「最後の切り札」だ。ピーク時には９万2000人いた人口も、製鉄所の合理化とともに減り続け、今は３万6000人あまり。以前あった大型デパートが撤退すると、市民は隣町のショッピングセンターに行くようになった。やがて盛岡にイオンができ、週末は片道２時間かけて出かけるようになった。こうして釜石の商店街はシャッター通りになってしまった。

震災を機に、新しいことをやろうと考えた。高校生と話すと「イオンが欲しい」。ならば、と交渉してみたら、来てくれることになった。これで盛岡まで行く必要がなくなった。逆に客を呼び込み、にぎわい創出につながる。現実は、まだ至る所で工事の真っ最中。客足の伸びも期待ほどではないようだ。人手不足も深刻で「カラオケ店を開きたいが店員が確保できない」と聞く。そんな未完成な街に、リスクを承知で来てくれたのだ。

三が日の来場客は４万人を超えたという。沿岸の人は冬は雪の多い内陸に行きたがらない。この時期こそイオンが釜石にできた意義が際立つ。

ラグビーW杯開催で見せたい復興の姿

Q 「明治日本の産業革命遺産」の１つとして橋野高炉跡の世界遺産登録を目指している。19年のラグビー・ワールドカップ（W杯）開催地としても立候補した。それぞれの狙いは。

A W杯は、世界中の人々から多くの復興支援を頂いたことに対する感謝を伝える場としたい。我々がやるべきは、まず復興すること。そして、その復興した姿を世界の人々に見せることだ。「W杯を開けるまでに復興した」という姿を発信したい。財源の問題もあるが、釜石はラグビーの街。他ではできない、釜石だからこそできる。多少の無理をしてでもやるべきだ、という認識の中で手を挙げた。開催地は３月に決まる。もし選

禁複製・無断転載

ばれたら、ラグビーを、スポーツを通じて世界の「絆」を発信していく。選ばれなくても、全世界に対するお礼はしていかなくてはならない。

橋野高炉跡は、近代日本のあり様そのものだ。ペリーが来て、開国し、そこから日本の近代化が始まった。多くの日本人が関わり、わずか50年でこの国のかたちを作った。明治日本の産業革命遺産群は単なる産業遺産ではなく、日本人のアイデンティティーそのものだ。富士山が世界遺産になればみな行くが、橋野高炉跡はそういうものとは少し違う。もちろん来て頂きたいし、お迎えの準備もする。ただ「行って見れば分かる」ものではない。勉強しなければ分からない。全国の学校現場で取り上げ、報道や書籍などで意義を伝えていく取り組みが必要だ。そのお手伝いをしたい。

地方創生は三陸復興がモデルに

Q JR山田線の不通区間（宮古―釜石）を三陸鉄道に移管することが決まった。「三陸は一つ」が一段とクローズアップされている。

A 昨年春に三陸鉄道が全線で運行を再開し、年末にはJR山田線問題が決着した。久慈―盛岡の160kmを一貫運行すれば利便性も高まる。行政としても、今まで以上に利用客増に努力する。

ただ一市町村が頑張ってもダメな面もある。鉄道も、道路も、街づくりも、三陸全体が一丸となって取り組むことが大事だ。幸い、国は地方創生に目を向け始めた。これに合わせて、三陸は一つになって振興策を考えていく必要がある。

震災が無かったら、こういう発想もなかなか出てこなかっただろう。震災で結束が早まった。私が会長を務める三陸の同盟会も新しい組織だ。様々な要望を国に訴える窓口として機能している。

ただ課題は山積している。まず資材高騰。震災直後は「国の支援がある」「みな家を建てよう」だったが、約４年が過ぎ、建築費も２～３割高くなった。公共施設の入札不調も目立つ。あと財源。復興交付金は有り難いが、これは復興に関わるもの・国民的理解が得られるものにしか使えない。でも被災地は、単なる復旧ではなく、持続可能な街にするにはどうすればいいかという観点で考えている。その部分の財源の手当が無い。さらに人手不足。企業の工場は再建された。商店も出来た。でも働く人がいない。働ける人はもうすでに働いており、人口流出も続いている。

三陸は全体が震災前から人口減など厳しい環境にあった。そこに震災が襲った。街は廃虚と化し、そこから今、立ち上がろうとしている。国が地方に目を向け始めたことは有り難いが「頑張れば応援するよ」というスタンスだ。そこは全国一律でなく、少しは被災地の事情に配慮してほしい。被災者の住まいや暮らしの再建を進めながら、将来の対策もセットでやらなきゃならない。そのプレッシャーは相当なものだ。

三陸が復興をなし遂げ、活力に満ちた街として生まれ変わることが、国の掲げる「地方創生」のモデルにもなる。この復興・再生ができなかったら、国の地方創生も大失敗だ。どこかの街で地方創生ができたとしても、被災地の三陸でそれができなかったら全て失敗だ。だから国を挙げて被災地に目を向けて頂かなければならない。

質問を終えて▶▶

釜石は「不撓（ふとう）不屈の街」だ。明治と昭和の大津波。戦時中の艦砲射撃。たび重なる甚大な被害を、その都度はねのけてきた。そして東日本大震災。再び釜石は立ち上がろうとしている。

時代は変わった。戦後３年で復活し、街を支え続けてきた製鉄所の火は消えた。最盛期に約7800人だった製鉄所の従業員は今や約260人。だが不撓不屈の精神は今後も健在だろう。イオンを招き入れた。W杯誘致に手を挙げた。逆境をバネに、果敢に挑戦し続ける街の姿は若者を引きつける。釜石を応援する「釜援隊」。銀行員や新聞記者の職を辞し全国から集まってくる若者たちと、市長ら地元の人たちとのコラボレーションに今後も目が離せない。

（盛岡支局長　**増渕　稔**）

禁複製・無断転載